

自然共生河川研究所(岐阜分室)だより

岐阜分室 研究第三部 次長 梅谷内 信夫

建設省木曾川上流工事事務所と岐阜県土木部の若手職員が一緒になって、河川内の生態について勉強していこうということで、「木曾三川自然共生研究会」を開催しています。

この研究会は現場を主体にしたものにしていこうということで、毎回現場に出て御指導を受けるとともに、土木技術者の素朴な疑問について意見交換をすることによって、河川の安全性と生態系の保全という大きな問題をどのように両立させることができるかについて、お互いに理解を深められるように会を進めております。

昨年8月20日に第8回の研究会を実施しましたので、その内容について報告します。

今回は中部及び近畿地方の河川の中上流部に生息するアジメドジョウの生息環境について名古屋女子大学の駒田格知先生に講演をいただき、その後、実際に生息している徳山の現地まで出向き、実際にどのような場所に生息しているかについて研修を行いました。

講演内容は概略下記のようなものでした。

- ・アジメドジョウは秋にアジメ穴と呼ばれる河床の湧水のある空隙に入り産卵し、翌年の5月末から6月に15～20mmぐらいの稚魚になると河に出てくると言われていたが、実際の産卵は養殖時の状況や稚魚の成長度合から見ると、春に生まれると考えたほうが妥当である。
- ・アジメドジョウは一尾当たり100～150ぐらいしか卵を持っていないので、養殖には極めて効率が悪く、一般養殖業者が生産するには無理がある。
- ・産卵から30日ぐらいまでは卵黄に依存して生活するため、口と食道はつながっておらず、酸素は卵黄のまわりの血管からとっている。
- ・養殖で育てる場合、井戸水や水道水では育てることができず、河川水を利用しなければならないが、これは水生昆虫をエサとしているからでないかと考えられる。
- ・アジメドジョウの稚魚の消化管の中を調べると、ほとんどが動物性のエサ(ユスリカ等)を食べているが、これはユスリカが藻類を食べており、結果として植物性のエサを食べていることになる。
- ・アジメ穴から出た稚魚が最初に居つくのは、河床が砂か、砂と泥が混じったような場所で流速がほとんどないところである。
- ・体長30mmぐらいになると流れがあり、河床に砂利等があって隠れることが出来るような場所に出てくる。

- ・体長70～80mmぐらいの産卵出来るような大きさになるには2～3年かかり、これぐらいの大きさになるともう少し流れの速いところで生活する。
- ・川の状況を知るために遊泳魚だけ調べるのではなく、底生魚も調べることが大切である。河床に細粒分が堆積し、はまり石状態になると底生魚はほとんどいなくなる。
- ・アジメドジョウはある程度の川幅、流量、変化の具合がないとその川で繁殖出来ない。等でした。

それを受けて午後からは参加者全員で現地研修に行きました。場所は事前に先生と相談し、その場所に行けば必ずアジメドジョウが観察できること、小さいものから大きなものまで生息する条件が近くで見れる場所であること、参加者が比較的安全に川に入ってアジメドジョウを観察できること、等を考慮の上揖斐川上流の徳山地区に入ることになりました。

現地に到着し川をのぞきこみましたが、アジメドジョウが見つかりませんでした。しかし目も慣れてよく見ますとあちこちにいるのを発見することが出来ましたが、どれも20～30mmぐらいの小さなものがほとんどでしたが、これは流れの弱い場所ですのでこれぐらいの大きさのアジメドジョウが生息するのに適した場所ということになります。

もう少し大きなものを獲ろうということで少し流れのあるところで網を使って河床の石を踏みこんでみたところ、もう少し大きなものをとることができ、大きさによって息む場所を変えていることを自分の目で確認することが出来ました。

今後共、このような現地を主体にした研究会を続け、より良い川づくりに少しでも貢献できたらと考えています。



現地研修の状況